

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のためめ努力とその魅力に迫る～

## File 01 / (株) 清水園

### 変わりゆく時代に、変わらない心を 磨き抜かれたおもてなしを未来につなぐ

しみずし まこ  
清水志摩子

(株)清水園 代表取締役社長

1945年、愛媛県八幡浜市生まれ。清水園5代目となる夫・清水猛から2006年に事業を引き継ぐ。清水園再建とあわせて「NPO法人全国おかみさん会」理事長、「さいたま観光国際協会」会長などの要職を歴任。

しみず たかまろ  
清水孝磨

(株)清水園 専務取締役

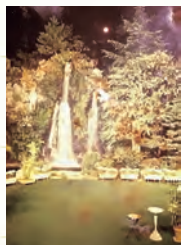
1996年生まれ。2022年6月専務取締役に就任。



明治3年創業の老舗・(株)清水園のルーツは江戸期にまで遡る。氷川神社のお膝元、婚礼や大規模なパーティーの舞台として、地元の人々に愛され、多くの著名人が訪れたハレ舞台だ。7月のリニューアルオープン控え、長年にわたって同社の顔として活躍する清水志摩子社長と、次代を託された清水孝磨専務にお話を伺った。

#### 氷川様とのご縁も深く、大宮きっての老舗料亭に

清水園のルーツは、慶応年間に寺社奉行に勤めていた佐倉藩士・清水うちゅうだと伝わっています。彼が武蔵國大宮に移って商いを始め、二代目・友吉が営んだ蕎麦屋が大繁盛したことから、割烹料理や洋食にも手を広げました。当時は珍しい3階建ての大店で、屋上に設けた水盤に屋形船を浮かべて夏は氷柱を立て芸者衆がうちわであおぎ楽しんだという逸話からも、その盛況ぶりが伺えます。



広大な敷地は豊かな緑と瀟、池に彩られ、「清水公園」と親しまれた。

その後、店を移築したのが、現在の清水園がある氷川神社参道そば。水と緑に彩られた1万坪を超える敷地には、本館の他にも趣向を凝らした離れ屋が20以上あり、かつては温泉も湧いていたとか。東京からのアクセスがよく、多彩な楽しみ方ができる名店として、一般のお客様はもちろん政財界の人物や文化人が集い、名声を高めていきました。

#### 中興の祖の手腕で、結婚式・披露宴といえば「清水園」が定着

明治初頭から戦前まで約半世紀にわたり「清水公園」と親しまれた広大な土地は、戦後の混乱や相続によって縮小してしまいましたが、この危機を救ったのが三代目・清水ふさです。埼玉県で女性初の自動車免許を取得するなど、先進的な考えと行動力を併せ持った名女将でした。

ふさは1953年に「清水園」を株式会社に改組し、同時に県内最大の150畳の大広間を持つ豪華な建物への改装も行います。料亭旅館を超え、結婚式場・披露宴会場にも経営を広げた結果、氷川神社で神前式を挙げ、清水園で披露宴を執り行うのが、大宮っ子のステータスとなりました。

#### 窮地に陥っていた清水園を「きちんと正しいハレの場」に

私・志摩子は、当社においては六代目となります。ふさの後、四代目を継いだのは清水時子と婿である常夫。そして五代目が私の夫である清水猛です。1974年にふさが他界した頃は、何度も相続やオイルショックによってかなり経営が厳しくなっており、土地を切り売りしながらしのぐような状況でしたが、どうしても再建したいという夫の願いに応じ、共に経営に携わるようになりました。

私が代表となってまず掲げたのは「明朗会計」「安心安全」そして「おもてなしの向上」というテーマです。チップなどの不透明な慣習を改め、スタッフの守秘義務を徹底するなど、今でいうコンプライアンス教育にも力を入れました。あわせて西洋式ホスピタリティと料亭のおもてなしの融合を図り、お客様が安心してくつろげる「きちんと正しいハレの場」への磨き上げを図ったのです。地元愛の強いスタッフの理解もあり、みんなで努力を続けた結果、清水園は再びにぎわいを取り戻しつつありました。

#### 新たな時代に歩みだすため コロナ禍でも守り抜いた雇用

そんな折、世界を襲ったコロナ禍によって、飲食・イベント業界は大きな打撃を受けることになります。しかし、ここでも私たちの心は折れませんでした。多くのイベントが中止となる中でも予定通りに新館リニューアルの計画を進め、ビヨンドコロナを共に歩む社員教育に力を入れてきたのです。

ビヨンドコロナの2024年7月、満を持して皆様にお披露目する新館は、七代目となる孫の清水孝磨が中心となって推進しました。氷川参道の緑を借景にした、優雅なアーチを描く大ホールは、さいたまの新たなにぎわいの発信地となることでしょう。

幾代にもわたってご愛顧くださるお客様に感謝を込めて、「清水園としてあり続けること」。それが当社の変わらぬ誓いです。



2024年にリニューアルオープンする清水園新館。優美な姿の新たなランドマークが生まれる。

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

## File 02 / オリエンタル火工(株)

### 人の和・企業の和・社会の和 誠意と挑戦で咲かせる大輪の花



しんどう ひろし  
進藤 博司  
オリエンタル火工(株) 代表取締役

1960年、さいたま市大宮区(旧大宮市)に生まれる。日本大学で応用化学を学び、日本化学(株)を経て、1986年にオリエンタル火工(株)入社。1998年、先代・孝氏より事業を承継し、代表取締役に就任。

しんどう ひろき  
進藤 大輝  
オリエンタル火工(株) 取締役

1995年さいたま市大宮区生まれ。日本大学大学院で化学を修めた後、オリエンタル火工(株)に入社し、同業の信州煙火工業(株)に出向。2021年帰社、取締役就任。

2021年(令和3年)に創業120周年を迎えたオリエンタル火工(株)。現在ではさいたま市内唯一の花火製造会社となった同社は、大宮の発展と足並みを揃え、戦災や不況を乗り越えて家業を守り継いできた。その長い歩みについて、3代目である進藤博司社長と、4代目大輝取締役にお話を伺った。

#### 鉄道開業で発展著しい大宮と共に

当社の前身は、1901年に私の祖父である進藤儀一郎が大宮の堀の内で設立した、進藤煙火工場という花火製造会社です。当時の大宮は1894年の鉄道停車場開業を受けて成長著しい時代で、飲食店などもたいそう繁盛していたそうです。

そこで、隅田川の花火のような大会を大宮でもという声があがり、大正10年に初代と近隣の同業者が見沼用水の橋のたもとで花火を打ち上げました。それが大宮花火大会(現さいたま市花火大会)の始まりとなりました。

#### 戦火を乗り越え発展する事業

昭和に入って間もなく、日本は戦争へと傾いていきます。満州事変、そして太平洋戦争の勃発によって、火工技術を持つ煙火店は軍の要請によって火工品製造工場へと転用されることになりました。敗戦にともなってGHQの命により工場は閉鎖され、一時廃業に追い込まれますが、すぐに業務を再開。そこからは平和のための花火製造に打ち込んでまいりました。

現在の社名であるオリエンタル火工(株)に改組したのは1961年(昭和36年)で、ほぼ同時に父・孝が二代目として事業を承継しています。高度復興期にも重なり、父は都市化が進む大宮から、郊外の寄居町に工場を移転。好景気を受けて全国で盛んに花火大会やイベントが開かれた時代で、需要に対応すべく新工場を開設するなど、当社を大きく成長させてくれました。

#### 難易度の高い都市型花火大会をけん引

そんな父の跡を継ぎ、私が3代目となったのは1998年(平成10年)のことでした。バブル崩壊後、しかも父の病気による急な代替わりだったため、暗中模索の承継でしたが、頼りになる社員に支えられてどうにか乗り越えることができました。

景気以外にも難題は山積みでした。さいたま市は既に大都市

になっており、条例によって花火大会の開催にも様々な規制がかかるようになっていました。どんどん人家やビルが建つ市街地では打ち上げ場所も限られる。その一方で観客は増え、セキュリティ対策も難しい。

より美しく新しい花火を作るべく技術開発に打ち込みつつ、安全に大会運営すべく主催者と話し合い、警察や消防と調整を行ってきたのも、花火を見上げて歓声をあげるお客様の笑顔が見たい。その一念からです。

#### さいたまの花火の伝統を次の世代へ

自らの苦勞を踏まえて、将来を託す四代目には大学院にて多くを学んだ後に入社してもらいました。より瑞々しい感性で、新しい花火の開発をと期待してのことです。しかし、ここでもコロナ禍が立ちふさがりました。花火業者にはまさに暗黒の時代です。

大きな大会やイベントは、ひとたび中止してしまうと、再開には本当に多大なエネルギーが必要になります。さらには停滞によって技術が失われてしまう恐れもある。

ですから、これまで東日本大震災やその後の台風被害など、多くの困難を乗り越えてきた経験をいかし、今回もふんばって、社員と技術を守りながら時を待つことにしました。

幸いにして花火の中に詰める星(火薬の玉)は、長時間寝かせることでこなれて、よりよい状態になります。美しい花火を見たいといったださる多くの方々のために、丹精込めて手作りの花火玉をのびのびと打ち上げられるようになるまであと少しでしょうか。

さいたま唯一の花火業者として、地元企業や関係各所、花火を愛する皆様にぜひご協力いただき、大輪の花を大空に咲かせ続けたいと思います。



創業120年の伝統と、革新性をあわせもった花火と、技術を磨き続けている。

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 03 / マルキユー (株)

## 製糸の副産物をつり餌として有効活用 SDGsを先取り、つり文化の発展に貢献



みやざわ まさのぶ  
宮澤 政信

マルキユー(株) 代表取締役会長

1940年旧大宮市生まれ。学生時代から野球に打ち込み、王貞治氏を擁する早稲田実業を破って甲子園に出場したことも。明治大学法学部から証券会社を経て1964年、マルキユーの前身である小口油脂(株)に入社。2000年4代目社長就任。2016年会長就任。

おかだ のぶよし  
岡田 信義

マルキユー(株) 代表取締役社長

1956年鴻巣市生まれ。亜細亜大学経営学部卒業後、1978年入社。1984年には大阪営業所所長として同社初の関西拠点を立ち上げ、1989年には桶川新工場の計画推進を担う副工場長に就任。2003年からは丸九(中国)有限公司の設立に尽力し、2016年、5代目の社長に就任。

マルキユー(株)の前身は、1910年(明治43年)に開業した長野県岡谷市の㊦小口製肥合資会社の㊦大宮支店として開業。(後に小口油脂(株)からマルキユー(株)に改称)。創業から1994年までは、現在のさいたま新都心地区に工場があった。鉄道の発展や事業拡大によって桶川に移ったが、長年さいたま市と共に成長してきた同社の歴史と今後の展望を、5代目社長・岡田信義氏に伺った。

けるのが仕事でした。海なし県で淡水魚づりが主流の埼玉から、圧倒的に海づりが強い関西や、九州・沖縄エリアまで、一体何度通ったことか。

若かったとしかいえませんが、その元気を買ったのか、わずか数年で大阪支店の立ち上げもまかせてもらいました。若い社員の意欲や裁量を尊重するのは、この当時の社風かもしれないですね。最近でも女性社員の声から生まれた「アミ姫」という製品が大ヒットを飛ばしています。

### 製糸の副産物を活用したSDGsの先駆け

「つれるエサづくり一筋」をモットーに掲げる当社は、現在、国内・国外含めトップクラスのつり餌メーカーであると自負しております。

その原資となったのが蚕です。会社のルーツである長野県岡谷市は製糸業が盛んで、繭から絹を製糸する過程で出るサナギを、肥料や油脂、養鶏・養魚用のエサに用いていました。サナギから油を搾り、搾りかすを粉末化して肥料や飼料をつくる。副産物まで無駄なく使い切る、今でいうSDGsの先駆者的ビジネスです。当社が埼玉に進出したのも、現在のさいたま新都心地区で片倉工業さんが製糸工場を営んでいたからでした。



現さいたま新都心の線路わきにあった工場。さいたまクーンは、蚕の紡ぐ「繭」から名付けられた。

### 桶川移転を機に自動化・IT化に成功

1994年、さいたま新都心の開発にともなって、当社は工場及び本社機能を桶川の工業団地に移転しました。私はこの工場立ち上げでも主力メンバーに任命され、製造から商品管理、搬入搬出まで一気に自動化を進めていきました。

いま、大型トラックが倉庫前に並び、ロボットが自動出荷する様子を見ていると、人海戦術だった自分の若い頃とは隔世の感がありますが、その分開発や営業に注力できるよう省力化による経営改善ができたのだと、誇らしい気持ちになります。

### つり文化振興の情熱を、未来につないで

2000年代には、バスフィッシングブームの立役者である田辺哲男氏の監修で、ルアーをはじめとしたつり具の開発もスタート。一流のつり師と共に、本当につれるもの、つり場で役立つものを開発するスタンスが、高い評価を受けました。

ゲームフィッシングは今後ますます注力したい分野であり、現在、世界のトップトーナメントを転戦している伊藤巧プロも当社の社員。今後はギアやウエアの開発にも、どんどん関わっていただく予定です。

創業115年を目前に控え、当社はこれからもより広い意味で「つり文化」「ウォーターレジャー」振興に携わっていきつりです。より楽しく安全につりができる環境整備をしたり、自然と触れ合う機会の減った子どもたちに、つりの楽しさを伝えたり。まだまだマルキユーにはできること、すべきことがあると、次代に託す未来を楽しみにしています。



恒例のヘラブナつり大会は、子どもたちが自然や命と向き合う貴重な機会に。

### 参入から20年で国内トップメーカーに

戦時中は食糧難に対応して食用油の製造販売も行うなどの苦労を経て、本格的につり餌製造を始めたのは1967年のこと。高度成長期とつりブームが重なって、競合も多かったようですが、鮒や鯉などの淡水魚がよく釣れると「サナギ粉」や「赤へら」が大ヒット。1980年代には海づり用の餌にも挑戦し、「チヌパワー」「アジパワー」など、今なおつり人の定番となるシリーズを生み出しました。参入から約20年で、一気にトップブランドの仲間入りを果たしたのです。

### 社員の熱意を尊重する社風が成功を生む

私が営業として当社に入ったのは1978年のこと。当時の営業はトラックに商品を積んで、全国各地の販売代理店を巡って届

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

## File 04 / (株)山家・(株)う匠山家

### 大宮を代表するうなぎの老舗 義兄弟が両輪となって味と技を守る



小林慎一郎

(株)山家 代表取締役社長

1956年、さいたま市大宮区生まれ。大東文化大学を卒業後、家業である山家に入社し、うなぎ職人として修行を積む。2009年、先代・森一氏より事業を継承。5代目として老舗ののれんを守っている。

大村 晴利

(株)う匠山家 代表取締役

1951年、静岡市生まれ。日本大学から商社勤務を経て、結婚相手の家業である山家に入社。大宮YEG会長、日本YEG会長などを歴任し、2007年、のれん分けにより(株)う匠山家を設立。

大宮駅の東口を行くとすぐに、鼻をくすぐる香ばしいうなぎの匂いが漂う。地元で愛される老舗・山家は、現在、由緒ある店構えを守る本店(株)山家と、うなぎの魅力を広げる(株)う匠山家という2業態で経営されている。職人肌の本店社長・小林慎一郎氏と、のれん分けで新業態を託された、(株)う匠山家オーナー・大村晴利氏にお話を伺った。

#### 火事も乗り越えて守られた秘伝のたれ

「明治5年創業」とされていますが、当店の本当のルーツは、どうやらもっと古いようです。江戸末期に一旗揚げようと新潟から上京してきた小林善四郎という青年がいたのですが、なにぶん激動期ですからそううまくは行かない。失意の中、帰郷するため路銀を稼ごうと、川魚を獲って中仙道沿いで屋台を出したところ、思いがけず繁盛した…というのが当店のルーツだそうです。

ではなぜ「明治5年」と公称しているのか。それは1960年に起きた大宮東口駅前火災で持ち出せた数少ない財産の中に、う



1960年の火災後に再建された本店。ふっくらと焼き上げたうなぎに秘伝のたれがしみこむ。

なぎ屋の命であるたれ甕と古ダンスがあり、その中から「明治5年に常連客にお金を貸した」という証文が出てきたからです。

常連がついていたのだから、実際にはもっと前から営業していた事になりますが、実存するのはこの証文の年月だけだからと創業年にしてしまう。そういうおおらかさが、この家系の血筋にはあるようです。

#### 大宮っ子に愛されるお座敷食堂への転身

2代目・善兵衛、3代目・八百吉の頃の大宮は、鉄道の発展と好景気によって、夜ごと政財界の旦那衆が酒宴を開いていたそうです。山家も当時は料亭で、時の宰相が訪れたこともあるとか。

しかし4代目の森一の時代に、前述の大火災が起こります。

たれ甕以外のほとんどの財産を焼失したのを機に、庶民が楽しめる気軽なお座敷食堂へと方針転換し、現在の山家の姿になりました。

現在、本店を指揮するのは、森一の息子である5代目・慎一郎。自ら厨房で腕をふるい「うなぎはやっぱり山家じゃなきゃ」と、大宮っ子に愛される伝統の味を、確かな技で守っています。満席になったらいったんのれんを下ろし、ゆっくりと料理をご堪能いただくという方針にも老舗の矜持が感じられます。

#### 伝統とモダンの両輪でうなぎの旨さを発信

同時に先代は、ただ老舗ののれんを守るだけではなく、新たな挑戦も必要だと感じていたようです。火災を経験したことから学んだリスクヘッジ



駅ビルの中でうなぎと酒のマリアージュを楽しめる「大宮う匠 山家膳兵衛」。

かもしれないが、2007年には娘婿である大村晴利にのれん分けし、新業態「う匠山家膳兵衛」を立ち上げさせました。

「大宮う匠 山家膳兵衛」の名で、駅ビルや大規模ショッピングモールに出店した店舗は、明るくモダンな雰囲気、幅広い層のお客様に、うなぎの美味しさを発信しています。

看板のかば焼きは、秘伝のたれを共有して山家伝統の味を守る。同時に、時代や人の好みにあう新たな名物を…と開発した塩焼鰻重は、ごまかしの効かない素材の良さが好評を博し、う匠山家膳兵衛の看板メニューとなりました。

日本YEG会長などを歴任し、生まれたネットワークにより、全国の旨い食材や希少な銘酒に出会えたことが他店舗との差別化や新しさに活かされています。

#### 伝統の味を次代へとつなぐ、承継準備も着々と

大宮駅の東口は、近い将来、大規模な再開発を控えています。そんな大きな変化の中でも「山家のうなぎの味わい」をしつかりと守り継ぐべく、現在、次代を担う息子たちが店に入って修行を重ねています。

創業より150年…もしかしたらもっと長い伝統を持つ山家のうなぎを、大宮の街でいつまでも。味と技だけでなく、そんな想いもつないでいけたらと願っています。

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 05 / 齋藤工業株式会社

## 建築一筋100周年

## 街をつくり、人を育てて目指す、次の100年



### 齋藤 恵介

齋藤工業株式会社  
取締役社長

1948年、さいたま市(旧浦和市)生まれ。日本大学を卒業後、竹中工務店に勤務し、1978年同社に入社。1996年、3代目として事業を承継すると共に一般社団法人さいたま市建設業協会の会長などを歴任し、2014年10月からさいたま商工会議所常議員。

### 齋藤悠美子

齋藤工業株式会社  
取締役社長室長

1982年、東京都世田谷区生まれ(さいたま市(旧浦和市)出身)。フェリス女学院大学大学院博士前期課程修了。海事法務業を15年間営む。2014年入社、2023年4月から同社取締役社長室長に就任。

浦和競馬場、さいたま市庁舎、浦和コルソなど、さいたまに縁のある人なら誰もが知る大型プロジェクトを、多数手掛けてきた齋藤工業株式会社。2024年4月にちょうど100周年を迎え、現在は浦和駅西口で進む再開発を主導する同社の歩みと、次代に託す理念を、3代目社長・齋藤恵介氏にインタビューした。

続けます。1960年代に埼玉県で初となるゼネコンとのJVを成功させ、1970年代にはコンピュータによる総合管理システムを導入するなど、変化をいとわず先進的な経営に挑戦し続けた2代目でした。

### 社員の成長と地域貢献で、発展しつづける会社に

「性行 資性篤実 人格円満にして公德心に富み 指導力抜群」と社内外から慕われた父の跡を、私が継いだのは1996年。大学卒業後、ゼネコンで外勤・内勤の経験を7年間詰んで家業に戻った私は、社長室に所属して経営ノウハウを学んでいました。

バブル期やリーマンショックなど、波乱の時代を当社が乗り越えられたのは、多角経営に走らず「建築一筋」を貫いてきたから。そして同時に「人と業界を育て、経営革新を続けてきた」からではないかと私は思っています。

初代は戦後の復興期を担うべく、地域の建設業者の共栄を願って埼玉県建設業協会の発起人となり、新たな工法の勉強会なども立ち上げました。2代目もその意思を継ぎ、県内のみならず社団法人全国建設産業団体連合会会長という大任を務めています。

3代目である私も、人を育て、人に報いることが会社の礎であるという理念は同じです。100周年を迎えられたのも、これまでの従業員一人ひとりの努力があってこそ。当社で働いているから得られる学びと刺激を社員に贈るため、後継者である齋藤悠美子取締役を筆頭に、全社員を対象としたドバイへの研修旅行を実施しています。あわせて行った社屋の全面改装も、社員が快適に働き、能力を十分に発揮できる環境への投資と考えています。

「建築一筋 100周年」。ぶれない方針を掲げて社員と仕事の質を高め、地域に貢献することで、齋藤工業は発展していく。私はそう信じています。

まさに街をつくる仕事。創業100周年を記念し、浦和駅西口再開発の現場で撮影されたポスター。



### 一世一代の大事業で、官の齋藤、の評価を確立

当社は1924年に、私の祖父である齋藤雄吉によって設立されました。故郷・会津若松から単身上京し、浅草の土建会社で修行した後に独立。「齋藤工業所」を浦和に立ち上げました。

堅実に実績を積み上げていた当社が、一躍名を馳せることになったのが、1948年に請けおった浦和競馬場の建設工事です。現在の金額に換算すると数百億円に及ぶ建設資金を立替えての条件付き案件でしたが、これを見事にやり遂げたことで、学校や公営住宅など官庁の仕事が次々に受注することになります。埼玉エリアで「官公庁といえば齋藤、という評価を固めた、祖父にとって、まさに一世一代の大仕事となりました。



初代畢生の大事業となった浦和競馬場の建設。“官の齋藤、”として一躍名を上げることに。

### 先進的な経営感覚で、事業を成長させた2代目

1962年、祖父の逝去にともなって、父・齋藤裕が2代目となります。すぐに着手したのは法人への改組。それまで約40年、職人気質な祖父の意向で個人経営にこだわってきましたが、高度成長期を迎えて事業はぐんぐん成長しており、やはり近代的な会社組織への進化が求められるタイミングでした。

齋藤工業株式会社へと生まれ変わった当社は、浦和市庁舎や上尾運動公園体育館、そして皆さまご存知のさいたま商工会議所会館など、公的な施設を数多く受注し、着実に成長を

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 06 / (株)わた忠

## 綿布、うつわ、クラフト教室 時代にあわせた業態で、街角ににぎわいを



せきね ちゆうし  
関根 忠史

(株)わた忠  
代表取締役社長

1969年、さいたま市岩槻区生まれ。明治大学商学部卒業後、清水焼商社に就職。京都で日本文化のルーツや、陶磁器への見識を深める。1995年、(株)わた忠入社。2008年社長就任。関根家の長男は代々「忠」の文字を引き継いでいる。

せきね まゆみ  
関根真由美

(株)わた忠  
取締役

1970年、東京都江東区生まれ。青山学院女子短期大学卒業後、損害保険会社を経て1996年に(株)わた忠入社。2021年取締役就任。

城下町・岩槻で江戸時代から続く長い歴史を誇る(株)わた忠。その名の通り綿の仲買業から始まった社業は、代を重ねる中で大きく変化した。堅実に、そして柔軟に。時代にあわせて進化しつづける老舗の心意気を、13代目・関根忠史社長と、妻でありよき経営パートナーである関根真由美取締役に伺った。

訓と共に、私は2008年に13代目として事業を引き継ぎました。

現在当社は、日本各地の窯元から買い付けたこだわりの器を販売するセレクトショップと、ちりめん細工のクラフト教室を運営しています。この教室を始めたきっかけは、地域の一大行事である「人形のまち岩槻まちかど雛めぐり」でした。20年以上前に第1回が開かれたとき、懇意にしていた人形作家さんに請われ、会場を飾るちりめん細工の手配をしたところ大好評で、イベントが終わっても展示を続けることにしたのです。

そのうちに「自分でも作ってみたい」という方が増えたことから、店の一角で教室を開くことになりました。最初は人形作家さんが講師を務めていましたが、今では妻とベテランスタッフが指導役を務めています。

教室はすべて1回ごとの予約制。いつ来るかも、何を作るかも、作業するペースも生徒さんの自由です。日常を離れ、気の合う人と楽しくおしゃべりしながら、美しい布や糸に触れるひとときはとても癒されると好評で、長い方はもう15年以上通っていらっしゃいます。

### 集い、楽しむ人の輪を、いつまでもこの街に

教室では一服の時間があり、妻がつくった軽食を提供しているのですが、その時にはもちろん私が選び抜いた美しい器に盛りつけます。教室をきっかけに、空間デザインやテーブルコーディネートに興味を持ってくださる生徒さんもいて、よい相乗効果を生む二本柱となっています。

教室を開くもう一つのメリットは、いつも人がいて、にぎわっている雰囲気が外に伝わることでしょう。「商売は人気がない」というのは、東京の活気のある商店街から嫁いできた妻のポリシーですが、実際その通りだと私も思っています。

歴史ある岩槻の町も、高齢化やベッドタウン化で、平素は人の行き来もゆるやかです。当店はその一角で、人が集まり、にぎわいの輪をつくりだす場であり続けたいと願っています。



伝統工芸であるちりめん細工づくりを習う皆さん。干支やベットの、好きなテーマでマイペースに楽しんでいる。

### 創業は江戸中期。230年にわたり岩槻の地で



大正～昭和初期の店舗にて。10代忠蔵(右)11代忠七(左)結納の写真と思われる。



広い間口から街路樹を望む店舗。日本中の名窯から選んだ美しいうつわが並ぶ。

「わた忠」というのは、綿布の仲買人をしていた初代がつけた屋号で、創業は江戸・寛政年間(1790年代)と伝わっています。

以来230年、岩槻で商いを続けているわけですが、かつての綿や布から、うつわを扱う店になったのは、9代目・忠吉の頃でした。

大正期の繊維産業の衰退を見て、より堅い商売をしようと考えたのでしょう。やがて「瀬戸物・陶器のわた忠」と評されるようになり、現在まで続く事業の柱となっています。

私の父である12代目・忠一は、日用品だけでなく、人生を彩るような良質な器を扱える店になりたいと、

結婚式の引き出物などの進物サービスにも乗り出しました。また、さらに、全国の窯元や作家さんとのご縁を広げてくれました。純和風でありつつ、明るくモダンな雰囲気をたたえた現店舗への建て替えを決断したのも、父の時代です。

### まちかど雛めぐりをきっかけに始まった新事業

「借金せず、腹八分目で、商いは飽きないように」。そんな家

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

とうぎよく  
File 07 / (株)東玉

## ひな人形・五月人形、ランドセル、そして小児科 子どもの幸せと健やかな成長に代々尽くして



とつか だいすけ  
戸塚 大介  
代表取締役社長

1971年、さいたま市岩槻区生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、(株)NHKアート入社。独立してフリーデザイナーとして活動した後、2005年に(株)東玉入社。2017年、7代目の代表取締役役に就任。現在岩槻人形協同組合理事をはじめ、業界の要職を歴任。

とつか たかし  
戸塚 隆  
代表取締役会長

1940年、さいたま市岩槻区生まれ。幼い頃から祖父・巖氏(東玉4代目)の薫陶を受け、1963年に慶応義塾大学卒業後、(株)東玉入社。1988年代表取締役就任。2017年会長就任。過去、日本人形協会の会長をつとめ岩槻の地域振興および日本文化の普及に献身し続けている。

日光御成街道の宿場町として栄えた岩槻は、日本屈指の「人形のまち」として知られる。(株)東玉は、駅からすぐの場所に大型店舗と工房を構え、人形作りと販売を手掛けている老舗だ。子どもの成長を見守る家業への誇りと、伝統と職人の技を次代につなぐための挑戦を、6代目・戸塚隆会長と7代目・戸塚大介社長に伺った。

判断で、現在の東玉の礎を築いてくれました。

そんな巖の姿を見て育った5代目・健蔵と6代目・隆は、自社だけでなく人形のまち・岩槻の地域振興に、熱心に取り組みました。人形への愛と文化を語る東玉・人形の博物館や、技術をつなぎ、広める東玉人形学院の設立。現在岩槻地区最大の行事となった「まちかど雛めぐり」の立ち上げやさいたま市岩槻人形博物館の開設にも深く関わっています。

### 医師兼人形師。異色の初代に下賜された栄誉の称号

岩槻で人形作りが盛んになったきっかけは、日光東照宮造営のために招かれた職人たちが、日光街道沿いの宿場町に住み着いたためといわれます。

当社の創業者である戸塚隆軒は、そんな岩槻の町で江戸末期である嘉永期に医者をしていました。患者を選ばず親身になってくれる名医と評判だった彼は、趣味の人形作りでも玄人はだしだったようで、自作の人形を岩槻のお殿様に献上したところ大層気に入られ「西国、京都の人形師にも劣らぬ腕前。東国における人形作りの王となれ」と『東玉』の号を下賜されました。多くの名工がいる町で恐れ多いと固辞したものの、お殿様にいただいたありがたい名。そこで王に、(てん)を加えて「東玉」を名乗ることにしたのです。

### 五節句の普及、ランドセル販売。新たな挑戦が絶好調

少子化、核家族化、都市型住宅へのシフトと、近年、人形業界を取りまく社会環境は大きく変化しました。170年にわたって人形と共に歩んできた老舗の7代目として、この時代に、いかにして子どもたちの幸せと健やかな成長に寄り添い、豊かな文化と地域産業を支え続けるかと考えて、新たなチャレンジも行っています。

先代・隆会長が注力しているのは「五節句」の振興です。ひな祭り、端午の節句に、人日(1月7日)、七夕、重陽(9月9日)を加え、季節ごとの日本文化を世界にアピールしています。また2018年よりスタートしたのが、ランドセルの制作と販売です。華やかなショールームで、節句人形とランドセルを展示販売するこのスタイルは、子育てファミリーから大好評を博しています。



お内裏様が赤ちゃんを抱く子育て雛など、コンパクトで個性的なオリジナル雛が好評。ランドセル事業は同社の新たな柱となった。

ちなみに私は次男なのですが、長兄は小児科医となり、本店向かいの東玉ビルで開業しております。どこまでもお子さまの幸せと健やかな成長に尽くす。それが戸塚家の歩む道のようなのです。

### 中興の祖は四代目。岩槻駅前大きく事業が発展

以後も代々、本業の医師の傍ら人形師を続けていた血筋が、いよいよ人形作りを家業とするようになったのは、4代目・戸塚巖の代です。巖は、小学校を出るとすぐ12才で年季奉行に地元や東京の人形卸店で修行を積み、若干20歳で独立した優れた職人であると共に商才豊かな人でもありました。

関東大震災、戦争と難事が続いた時代でしたが、被災した家庭が新たに人形を求めると読み切った職人たちを守り育て、大繁盛したほか、岩槻駅前に出店するなどの思いきった経営



4代目が駅前に立ち上げた旧店舗。現在は店舗・工房を併設した岩槻の名所となっている。

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

File 08 / (株)木崎屋

## 命と暮らしを支える米屋がルーツ 大宮の発展と共に、170年の時を重ねて

いしだ かずひろ  
石田 和廣  
(株)木崎屋 取締役社長

1949年、さいたま市(旧大宮市)生まれ。日本大学商学部を卒業後、東京都中央食料協同組合に入社。1974年、(有)木崎屋入社。2003年、代表取締役社長就任。先代・啓蔵氏の時代より大宮商工会議所・さいたま商工会議所の要職を歴任。

いしだ ゆうぞう  
石田 優蔵  
(株)木崎屋 取締役

1979年、さいたま市(旧大宮市)生まれ。祖父から「蔵」の1文字をとって名付けられ、日本大学大学院で財政学を学び、2004年に(株)木崎屋入社、2007年に取締役に就任。



大宮駅から徒歩10分。近年次々とマンションビル建設が進む旧中山道に面して、洗練されたオフィスビルが建つ。その1階にひるがえるのは「木崎屋」と染め抜かれた藍のれん。大宮きつての老舗米屋として、戦火を超えて事業をつないできた同社の歴史を、石田和廣取締役社長に伺った。

### 中山道沿いの米屋として 激動の時代に家業をつないで

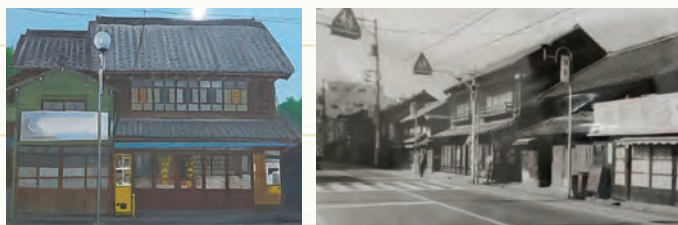
「木崎屋」という社名は、浦和にある木崎という地名に由来します。江戸末期の1852年、初代が大宮に移り住み、故郷の地名を屋号としたのですが、この初代が何をしていた人物か、確たる記録は残っていません。ただ、当社では浅草・玉姫稲荷のご分祀をいただき、代々お祀りしていることから、江戸に行商に出る飾り職人だったのでは…と推測しています。

現在のような米屋になったのは1887年、祖父である2代目から。木崎は見沼田んぼに近い地区なので、農業をやっている親戚がいたのでしょう。

しかしその後、日本は戦争に突入します。若い方はご存知ないかもしれませんが、戦時中は米・麦・味噌などの主食の販売・供給を、政府が管理していました。国民は配給手帳を持って、家族分の米穀をもらいに行くのです。2代目・3代目はそういう時代に、埼玉食料営団、食料品配給公団、大宮共和米穀企業組合といった配給組織の一員として、市民の暮らしを支えてきたのです。

### 戦後、急発展する大宮で 躍進した3代目・父の時代

戦後処理が終わり「木崎屋」の名を取り戻したのは1956年。ようやく(有)木崎屋として、米屋を再開できるようになった3代目の父に、転機が訪れたのは1983年のことでした。なんと



旧中山道に面する、かつての店舗を描いた油絵と1970年頃の写真。

近隣からのもらい火で、店舗が全焼してしまったのです。

父はこれをきっかけに社屋をビルに建て替え、1階は米屋、上階は賃貸物件にすることを決めます。一介の米屋としては大きな負債を抱えることとなりますが、折しも1982年には、大宮駅始発で東北・上越新幹線が開業することになっていました。

乗降客も人口も伸びるという父の予測は、見事に当たります。当時、大宮駅の駅弁や立ち食いそばなどの原料を一手に引き受けていたこともあり、米穀の売上は絶好調。賃貸フロアも竣工と同時に満室となりました。

### 不動産業とこだわりの米屋 2本柱で、次の世代へ

しかしながら商売には波があります。2003年に私が父から事業を引き継いだ頃、大宮では大規模開発が相次ぎ、駅からやや遠い当ビルは、一時全フロア空室の危機に陥りました。

そこで私も一大決心をし、現在でいうOAフロアへの全面改修に着手しました。オフィスで急速に進むパソコンやOA機器に対応できなければ、賃貸ビルとしての価値を失うと感じたからです。もちろんこの時もかなりの借金を背負うことになりましたが、判断が早かったことが幸いし、また満室にすることができました。

木崎屋の現在の事業としては不動産賃貸業が中心で、米屋の方はごく小規模です。しかし、だからこそ長年付き合いのある産地から、選りすぐりのおいしい米を扱おう。そんなこだわりを持って続けています。

商いは時代によって変わるものですから、5代目でも米屋を続けてくれるかは分かりませんが、この地で代々続く「木崎屋」の名に誇りをもって、新たなチャレンジをしてくれたらと願っています。



1983年、もらい火で店舗を焼失して建て替えられた木崎屋ビル。2004年、OAフロアに対応する大改修で、現在の姿に。

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

## File 09 / 医療法人慈正会 丸山記念総合病院

### 開設128年。 岩槻の人々の健康・幸福を支える、 信頼の医療拠点として

まるやま まさのり  
丸山 正統

丸山記念総合病院 理事長

1965年さいたま市(岩槻区)生まれ。順天堂大学医学部を卒業後、東京大学付属病院で勤務医を10年務める。2000年、丸山記念総合病院に入職。産婦人科医として子宮鏡手術では、地域以外の診療所からも患者紹介を受け診察している。2023年より同医療法人理事長。



遠く明治時代から、「岩槻のお医者さんといえば丸山さん」と頼りにされていた丸山家。地元の人の中には、親子三代にわたって赤ちゃんをとりあげてもらった方もいるといえます。少子高齢化や人手不足という逆風を受けながらも、いつでも安心の医療拠点として歩み続ける同院理事長・丸山正統医師にお話を伺いました。

任じて、日々患者さんと向き合っています。

また丸山記念総合病院は、TRFのメンバーとして一世を風靡したダンスパフォーマー・SAMの実家の病院として知られています。現在はコロナ禍の影響で中断していますが、SAMの考案した健康促進ダンスを、妊婦さん向けに改した「ダレデモダンス マタニティ」も話題を呼びました。

#### 明治以来の医師の家系 岩槻の医療を支えて

記録に残る丸山家の祖先は、江戸期に勝浦から移ってきた丸山龍八という侍で、岩槻藩で役人を務めていたようです。明治に入って私の曾祖父にあたる丸山五郎が内科医となり、1896年に丸山醫院を開設しました。以来128年、丸山家の子孫の多くが医者となって、診療科目を広げてきました。

父・正義が代表を務めた時代には「地域に根差し、大学病院に負けないような医療を」をモットーに地域医療に貢献してきました。

#### 130周年をめざし、逆風に 打ち勝つ病院経営を模索中

丸山記念総合病院があります岩槻区は、人口約11万人、高齢化率30%以上という地域になります。また、病院の経営をするにはとても難しい時代です。

医療を取り巻く環境の変化は目まぐるしく、地域に求められる役割を分析し強化させることが求められています。当院は、突然の傷病に対応する急性期医療の病棟と、急性期の治療の後、安心して退院できるようにリハビリを行い退院調整をする回復期病棟（回復期リハビリテーション病棟と地域包括ケア病棟）の機能を有します。

また、さいたま医療圏において、婦人科疾患と乳腺疾患に関して、患者シェアが高い病院ですので、その強みを生かしながら、今後の体制を考えていこうと思っています。

当院は2026年に開設130周年を迎えます。記念すべき年と、さらにその先の未来に向かって、まずはクリニック・診療所をはじめとした近隣の医療機関との分業・連携を進め、地域医療を支える存在でありつづけたいと願っています。

#### 最前線の医師として 実直に、そして親しみやすく

私もまた幼い頃からそんな家族の姿を見て育ち、当然のように医学の道に進みました。専門は産婦人科で、日々の診療を行っております。

医療は日進月歩ですから、最前線で実務を積みつつ、学び続けなければなりません。いつなんどき、どんな患者さんが来ても、プロの技と知識をもって診察できる病院であること。地域に良質な医療拠点であること。それが病院の使命であると



丸山五郎と正(10歳)と正次(6歳)  
(明治40年5月26日)



開設当時



現在の姿

# 100年企業を訪ねて

～長寿企業のたゆまぬ努力とその魅力に迫る～

## File 10 / (株)住田光学ガラス

### 強みは自由な発想を生み出す社風 「ナゼ?」を追い続けて、100周年の先へ



すみ た としあき  
**住田 利明**  
代表取締役社長

1950年、東京生まれ。1974年青山学院大学経営学部卒業後、住田光学硝子製造所に入社。経理などを担当する。2009年、先代の急逝にともない代表取締役社長就任。

与野駅からほど近い線路沿いに、(株)住田光学ガラスの本社兼工場がある。現在、光ファイバー製造など光学分野で独自のポジションを築く同社は、数多くの特許を持ち、海外からの引き合いも多いグローバルニッチ企業だ。1923年に東京で誕生して以来102年の歩みを、代表取締役社長 住田利明氏に伺った。

#### 古いガラスのリサイクルから始まって 光学ガラスの国産化に成功

私の祖父で当社の祖である住田利八は、元は彦根で下駄屋をしていました。しかし「人と同じ道をいきたくない」という性格だったようで、30歳を過ぎて都会で一旗揚げようと東京に出てきたところ、駅で気のいい人物に出会い、古いガスメーターのカバーガラスをリサイクルする商売に誘われたのだそうです。

手先が器用だった祖父はその後、ガラスを加工し、医師が額につける反射鏡となる凹面レンズを成形するようになります。



独学の自家製造ですがそれなりに需要はあったようで、このとき東京の巢鴨で住田光学工業(株)という会社を立ち上げています。

後を継いだ父・進は、将来の光学業界の発展を見越し、「光学ガラスの国産化」を志しました。当時光学ガラスはドイツからの輸入が当たり前の時代で、光学ガラスをレンズに加工する住田光学工業でも、母材となるガラスは輸入に頼っている状態でした。レンズをつくるにせよ母材からつくらなければ意味がない、なんとか原料から自社製造できないかと試行錯誤した結果、徐冷によるひずみのないガラス製造に成功し、住田光学硝子製造所(株)を1953年に立ち上げます。



同社の前身時代。自宅兼工場  
で光学レンズの国産化に挑戦した。

#### 次々と革新的技術を生み出す 「放し飼いの鶏」たち

当社の代表的な製品である「光ファイバー」や「ホタロン」などは、父の時代に基礎開発がなされています。1985年に大手

電機メーカーと共同開発した非球面ガラスレンズは、従来何枚ものレンズを重ねて調整していたピントを1枚のレンズに集約でき、光学業界における当社の名を一躍高めてくれました。

1989年に三代目社長となった兄・正利は販売面に手腕を発揮し、堅実に事業を進展させていましたが、2009年に急逝してしまいます。そこで急きょ私が4代目となったわけですが、大学は経営学部で理数系の知識などありません。ただ、当社には多くの優秀な研究者・技術者がいます。この人材が力をふるえる会社にすることが私の役割だと考えました。

研究・開発・製造。どの業務でも、自らのミッションに打ち込むためには、安定した待遇が不可欠です。そこで当社では「放し飼いの鶏であれ」というスローガンを掲げました。生活の安心は確保するよ。だから狭い鶏舎には見えないモノを追い求めて、自由に、自在に、しなやかに働こう。その理念を体現する「ナゼ太郎」という鶏がマスコットになっています。

通常、企業では研究職であっても「いつまでになんらかの成果を」と求められるものですが、当社はそういった要求をしません。好きなことを好きなだけどうぞ、という。すると、優秀な人材が自然と集まり、画期的な発明や技術がどんどん生まれる。100年かけて、そういう会社になったのです。

#### 独自性の高い技術・製品の数々で 世界が注目するSUMITAでありつづける

2023年に100周年を迎え、ナゼ太郎には妹分の「ナゼびよ」が誕生しましたが、それ以外に大きな変化などはありません。

「光学ガラス」の開発製造、光学ガラスの精密加工を行う「光システム」、光や画像を伝送する「光ファイバー」、医療用の「メディカル」。どの事業も世界的に需要が高まっており、昨年の売上高における海外比率は約50%。特許も毎年のように増えており、顧客対応力も高まっています。

素晴らしい成果を上げてくれる社員たちに、よりよい環境・待遇を整えれば、結果として業績は伸びていく。だから「現在の良い状態を維持する」が私の使命だと思っています。



事業拡大に伴い1993年にさいたま市に移転。この他、福島県南会津に製造拠点を展開している。

File 11 / (有)くまさか

# 表具師の矜持を受け継ぎ、 地域とともに100年移りゆく時代を 柔軟に乗りこなす

経師・表具師とは、掛け軸や屏風の仕立て、障子や襖といった建具の紙張り・張替えなどを手がける職人のこと。住環境が洋風化した今は身近ではないかもしれないが、(有)くまさかの仕事には創業以来の卓越した確かな技術が今もしっかり息づいている。熊坂 創社長と母の熊坂 知子会長にお話をうかがった。



## Profile

**熊坂 知子** (くまさか ともこ)  
取締役会長

1946年、船橋市生まれ。1970年、2代目芳夫氏と結婚。1991年、芳夫氏死去に伴い代表取締役社長就任。2001年、取締役会長。趣味はシャボンソウで現在も年に2回はステージに立つ。

**熊坂 創** (くまさか はじめ)  
代表取締役社長

1973年、さいたま市(旧浦和市)生まれ。東洋大学経営学部を卒業後、(有)熊坂表具店に入社。2001年、代表取締役社長就任。1級技能士(表装・内装仕上げ施工)などを保有し、技能検定委員などを務める。

## 「文雅堂」の名に込められた歴史 創業時から地域に根差した商いを

福島の松川町(現・福島市)から埼玉に出てきた祖父・熊坂 与七は県内で経師として修業を積み、大正から昭和に改元されたところに創業しました。昭和100年にあたる今年、創業100年を迎える(有)くまさか。当初は浦和橋のあたりに店を構えましたが、ほどなくして現在の場所に移転。以来、ずっとこの地で商いをしています。

うちには「文雅堂」という屋号がありますが、かつて「堂」の付く経師屋は県内でも3軒ほどといい、いずれも勝海舟が名付け



屋号「文雅堂」は職人による丁寧な仕事の象徴でもある

親だという都市伝説のような話が伝わっています。昔は経師のように「師」の付く職人だけが座敷に上がることを許されたといいますが、あなたが嘘ではないかもしれません(笑)。

祖父には、ご近所の方が亡くなったとき駆けつけて勝手にその方の家に上がり込み、無償で障子を張り替えた、というエピソードもあります。弔問客を迎える空間の設えまで家族は手が回らなろうと先回りしたのでしょうか、職人魂とともに商売をやらせてもらっている地元への感謝が感じられる話です。

## 激動の昭和とともに生き 表具屋として商売を広げた2代目

昭和45年に父・芳夫が2代目として与七の跡を継ぎ、表具店を開業しました。父は県立浦和高校卒のインテリながら、能楽に親しむなど多才な人でした。敬虔なクリスチャンでもあり、その縁で母と結婚。当時は職人さんたちと一緒に食卓を囲むことが当たり前で、母は毎日10人分以上の食事の支度に追われたそうです。高度経済成長と住環境の洋風化の波に乗り、壁紙や絨毯など経師の技術を生かした丁寧できれいな施工が評判で、順調に表具店として商売を広げていきました。

ところが平成に入って間もなく父が病に倒れ、あっけなく他界。高校2年生の私を筆頭に5人の子どもたちを抱え、父の跡を継いで社長になった母の苦労は並大抵のものではありませんでした。それでも祖父と父が地域に根差し培ってきた信用のおかげでパブル崩壊なども何とか切り抜け、多能工の職人さんにも恵まれてリフォームも手がけるようになりました。

## 皆の「幸せ」を目指して 職人目線と経営者としての視点を

必死に家業を守る母の背中を見て、私も早く一人前の職人になりたいという一心で、高校生のころから手伝い、大学時代は週3日アルバイトに入り、掃除と刃物砥ぎに明け暮れる日もありました。無我夢中で5年ほど経ったころ、ある人に言われた「あなたはスーツを着てもいいのよ」との言葉に、大学で経営学を学んだこともあり、自分は職人であるだけではなく経営者でもあるとあらためて気がきました。

社長就任6年後の2007年に社名を(有)くまさかに変更しました。コロナ禍では、職人とネット会議やSNSなどをフル活用して建設業ながらもテレワークを実現し、まだまだやれることは多いと実感しました。現在は創業以来受け継がれてきた技術を生かした住宅や店舗のリフォームをはじめ、リノベーションも多く手がけています。業界を担う一員として、社会に蔓延している「安ければいい」を払しょくし、職人の人件費の適正な向上を目指していきたいですね。

私は「幸せ」という言葉が大好きなんです。まず私と家族が幸せを感じなければ、社員・地域に愛されること、社会へ貢献することを謳っても、絵空事になりかねない。家業を継いで四半世紀の実



代々の職人によって繰り返し繊細に調整され、木製の台に艶が出るほど使い込まれた鉋



長い年月のうちに砥がれ続けて小さくなったのこぎりを愛おしそうに持つ熊坂社長

感です。次の時代につなげていくためには、「継ぎたい」「あってほしい」と思われる会社に育て上げる。そのためには先達を見習い、私も業態にこだわらずに次の波を柔軟に乗りこなしていきたいと思えます。

## File 12 / (株)正直屋グループ

# 幾多のピンチをチャンスに変えて 激動の時代を生き抜く

関東大震災、終戦という非常事態を女性の活躍で切り抜け、狂牛病、東日本大震災、コロナ禍といった大逆風も進取の気性で乗り越える…。その根底にあるのは、普遍的な価値観と屋号に込められた誠実な心。先達の智慧を受け継ぎ、新たな時代を見ずえて飲食業を牽引する4代目の山崎 誠司社長にお話をうかがった。



### Profile

山崎 誠司 (やまざき せいじ)

代表取締役社長

1969年、さいたま市(旧浦和市)生まれ。千葉大学を卒業後、銀行勤務を経て、28歳で正直屋グループの取締役として入社。先代の前社長とともに経営に従事。2024年、前社長逝去に伴い、(株)東京正直屋の代表を引き継ぎ、現在は(株)正直屋グループ4社の代表を務める。

### 老舗企業としての経験と胆力で 地域経済の活性化に貢献する

私が入社した2000年ごろから多彩な郊外型飲食チェーンの展開を活性化し、焼肉店を開いて1周年を迎える矢先、狂牛病騒動に見舞われました。飲酒運転罰則の厳格化や大型店舗の進出などでお客様の流れが変わったこともあり、事業の重点をケータリングや仕出し事業に転換。2012年に東京・練馬区に最新の冷凍技術を活用した「料亭工場」を稼働し、コンセプトショップとして「銀座割烹里仙」を開店しました。2013年から冷凍おせちをはじめ高級冷凍食品の販路を広げるなど事業が順調に動き出していたところに、今度はコロナ禍が直撃です。それも事業を見直す好機と捉え、現在は新たな成長戦略としてM&Aにも本格的に取り組んでいます。



中核事業のケータリングは華やかで本格的な和・洋・中のパーティー料理のみならず演出・設営にも定評がある

昨年、父の逝去に伴い社長に就任してあらためて老舗企業の存在感に気づき、地元密着の飲食業として県内の100年企業を応援する取り組みも始めました。これからも先達から受け継いだ商いの心を大切に、多様化する顧客ニーズやインバウンドといった環境変化にも柔軟に対応していきたいですね。

### 赤羽から北浦和へ

#### 先達の先見性が導いた事業展開

曾祖母・山崎 タメが1924年に、関東大震災後の混乱が残る赤羽駅前で「人様のお役に立つ働きをしたい」と開いた食堂「正直家」がルーツです。その娘・トモが腕の良い料理人の城之助と結婚して割烹仕出しも手がけ、近隣の大きな軍施設や高級将校から陸軍諸官庁御用商人として重用されて家業は大いに発展。ですから創始者をタメ、城之助・トモを創業者と位置付けています。

太平洋戦争で戦死した城之助が生前、事業拡大と発展の為土地を手配していた北浦和で、1948年に一族が力を合わせて(株)正直屋を設立。大衆食堂をはじめレストランや給食など、時代の要請に応じて多角的に飲食事業を展開しました。70年代には中山道沿いに宴会場や和室もある4階建てのビルを建設し、披露宴や寄席、祭り会場として地域密着型の商売を展開。近隣には浦和高校や埼玉大学があり、同窓会や社交の場としてもにぎわい、その立地を背景に本や文具を扱う文教関連事業も手がけ、盛況を見せました。赤羽といい北浦和といい、時代に沿い地の利を見極めた先達の慧眼は見事なものだと思います。



北浦和に移転した昭和40年代の正直屋。この頃から、多角的な飲食事業を展開し始めた

### 中小企業としていち早く取り組んだ 経営計画書策定と企業理念の制定

創始者、創業者を継いで3代目社長となった父・正之は、「お客様第一主義」のもとにスーパーマーケットや飲食業を地元密着型で展開し、中小企業としていち早く経営計画書の策定も進めました。需要が高まったケータリングや仕出し事業にも進出。1981年には(株)東京正直屋を設立し、東京を中心に千葉県、埼玉県を含めた南関東に商圏を拡大していきました。

経営計画は現在も毎年策定しており、わが社の羅針盤です。事業の多角化や商圏の広がりでも多様な職種の従業員が働くようになり、1977年には企業として統一的な経営姿勢を表す経営理念および社是を成文化。それが今日も大切にしている「天然自然の理にかなった経営」であり、お客様第一主義に徹した経営へとつながっています。

File 13 / (株) 鯉平

# “生き残る”ことは業界を守ること 強い信念で切り拓く“うなぎ”文化の未来

江戸時代の古文書にも名物として記述される浦和のうなぎ。さいたま市内には老舗の料理屋も多く、伝統産業に指定されている。うなぎの供給を支えるのが、加工品も含めて年間 750 トン超と日本屈指の扱い量を誇る (株) 鯉平だ。消費地問屋として本業を守りつつ、世界をも見据える5代目・清水 亮佑社長にお話をうかがった。



### Profile

清水 亮佑 (しみずりょうすけ)  
代表取締役社長

1986年さいたま市(旧大宮市)生まれ。中央大学を卒業後、証券会社勤務を経て、2010年(株)鯉平に入社。17年専務、23年代表取締役社長。先代の4代目・良朗氏とともに経営に従事し、25年1月に持株会社体制へと移行。(株)鯉平と鯉平フードサービス(株)を束ねる鯉平ホールディングス(株)の代表取締役社長。

### 地域性に支えられ

#### “うなぎ”文化の担い手に

「浦和に住んでいけば行きつけのうなぎ屋がある」と言われるこの地域性は、我が社の事業発展の大きな要因です。川魚は生きたまま運ばなくてはならない「活魚」です。流通の問題や食生活の変化により、大規模な川魚問屋として今では全国でも稀少な存在になりました。



昭和33年 4代目良朗を抱く初代平八

創業は1897年、蓮田出身の初代・清水平八が岩槻の川魚問屋で番頭として働いていたところ、氷川神社の参道沿いにある料亭の旦那にその働きぶりが認められ、娘と結婚し土地を譲り受けたことで、鯉の問屋を開業したのが始まりです。主に鯉を扱っていたので「鯉屋の平八」から鯉平に。2代目・重雄はドジョウやナマズも扱い、太平洋戦争下でも何とか家業を守り続けたものの、生まれつき身体が弱かったこともあり、早くに3代目の祖父・晃に家業を譲りました。時代は高度経済成長期。うなぎの消費量も増え、辛酸をなめつつも独自に養殖うなぎの仕入れルートを開拓し、取引先を大幅に増やし事業は拡大。私の幼少期の記憶はこの頃からで、活気ある従業員の声とうなぎ桶に注ぐ水音をよく覚えています。

### 時代に翻弄されつつも

#### 本業を守り、新事業を開く

4代目の父・良朗が事業を継いだのは、バブル崩壊後の「失われた10年」と呼ばれた時代。苦肉の策で祖父が手塩にかけた営業拠点を次々と閉め、会社機能を現在の本社に集約しました。不景気の中で何とかうなぎを売りたいと、持ち前の進取の気性から飲食店の経営にも進出し、店舗展開にも試みましたが、一部の店を畳まざるを得ない状況に陥ったことも。学生だった私は、当時の父のしんどそうな姿を今でも覚えています。それでも25年近く経った今、飲食事業を子会社化できるまでに成長させた父の功績は大きなものだと感じています。



4代目良朗誕生のお祝いで飾られたこいのぼり

### 事業の永続が日本の食文化を守る

#### 先達の道標をたどり世界の“うなぎ”へ

父がいつも、「先人の“諦めずに生き残る”という強い信念のおかげで今日がある」と言っていました。私もその言葉の重みを受け止め、鯉平が生き残ることが業界の発展と“うなぎ”という日本の食文化を守ることだと考えています。



鯉平では年間160トンものうなぎを熟練の職人が素早く丁寧に捌く

そのためにも大切なのは人材です。大企業のような強者の論理ではなく、いわば弱者の論理で「あなたに来てほしい」とアピールし、特定のターゲット層に届くようにと地域密着で取り組んだところ、雇用の定着も図ることができました。IoTやDXにも積極的に取り組み、配送ルートを見直すなど業務の効率化も進めました。社員が働き者なので、「こんなに休んでいいのか」と逆に抵抗勢力になることも(笑)。

少子高齢化によって国内の消費量が少なくなる以上、海外に目を向けることは必然です。ホールディングス化はこうした動きを迅速化するためでもあります。精通した人材を責任者として抜擢して海外事業部を立ち上げ、輸出も少しずつ増えています。

生き残り、世界に日本の“うなぎ”文化を広げ、多くの人に喜んでもらう。創業以来変わらぬ私たちの存在意義だと感じています。



自社開発のうなぎ串打ち機で効率的に串打ちし、職人が手直して丁寧に仕上げ